

週日の説教

金 大烈 神父 2008年10月14日(火)

《イエス様のみ旨にかなうものになろうとすれば、必ず神様は答えてくださる》

秋がだんだん深くなると稲の穂が重くなりますね。豊かに実り、満ちている稲は、謙遜するように頭を下げます。実りが豊かではなく、満ちていない稲は、頭を下げようとしても下げられません。それは信仰者にとっても同じではないかと思えます。

信仰者の実りといえは、霊的な心です。霊的に求める心、満たされる世界がなければ、私たちは信仰の生活をしていても外見的なことばかりを求めてしまうと思えます。内面的に、霊的に満たされるために私たちはいつも自分の信仰を振り返ってみなければなりません。もし、稲が実るように、私たちも霊的な何かで中身が満たされ、重さを感じるならば、私たちの口からは感謝の賛歌しか出て来ないと思えます。しかし私たちには、外見的なものばかりを求めて祈ろうとする心があるので、いつも怒りや憎しみ、ねたみに縛られてしまうのではないかと思えます。

(ルカ 11・37 41) 律法の精神は、神様に感謝する心です。"食事をいただくので感謝します" という意味で手を洗います。それが律法の精神です。しかし、律法学者達がいつもイエス様に責められたのは、律法の精神を考えずに律法の外見的なところに自分達を縛っていたからです。食事の前に手を洗うのは当たり前かもしれませんが、しかし、なぜ手を洗わなければならないのか、その理由を忘れてしまったファリサイ派の人々をイエス様は叱ったのです。律法の精神は感謝の心です。しかし、感謝の心を持たないのに習慣的に手を洗ったり、顔を洗ったりする、そして洗わない者を見たら責めようとする。そのような姿は、2000年前のファリサイ派の人々だけだ、とは思わないでください。今の私たちにも大切なことを忘れて、外面的なことを基準にして、人を批判し、責めようとする心があるとします。

イエス様に「もし、私たちが信仰の道に招かれてその道を歩むのならば、どうぞ、み旨を見られるように私達を導いてください」といつも祈ることが必要だと思えます。

私たちは、いくら頑張ってみても死ぬまで未熟なままかもしれません。しかし、何よりも大切なことは、『イエス様のみ旨にかなうものになろうと努力する心』だと思えます。そして『その心があれば、必ず神様は答えてくださる』と信じるのが、一つの信仰ではないでしょうか。

私たちはお互いに足りないところをたくさん持っています。その足りないところは、責めるためにあるのではなく、お互いに励ましあい、譲りあうためにイエス様がくださった一つの恵みとして、受け入れ、認めましょう。

そうすれば、相手に対して寛大な心が出来るのではないかと思えます。

ありがとうございました。